

1. はじめに

古来、加賀地方では手取川は七ヶ用水路を変えたといえ承せられている。このいわゆる「手取川流路七変化説」に史の根拠を与えるものとして、土居義武は其の著、重修加賀能登路水経（正徳四年、1714）の中で白山から日本海へ向って手取川は図1に示した七ヶ用水水系のうす扇状地の右翼端を流れる富樫用水に沿って当初流れていだが、その後、時代の経過とともに徐々に南遷し、中村、山島、大塚、中島、新砂川の各用水路に沿って其の流路を変えたのち、扇状地の左翼端に沿う現流となったと記述している。

本論文では、手取川の歴史に種大なロマンと色彩を添える流路七変化の仮説を文書・記録、地形、地名・集落分布、史蹟・遺跡分布及び地質を考察するににより反証し、新たな手取川流路変遷に関する仮説を提案する。

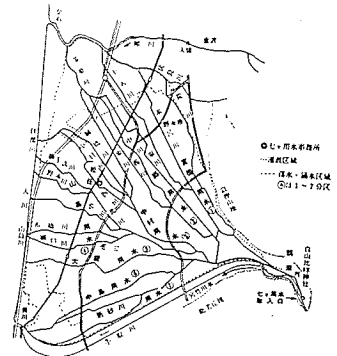


図1 七ヶ用水水系図
(手取川七ヶ用水説より)

2. 七変化説に対する反証

2.1 文書・記録

富田景周は其の著、金沢三河考（文化十二年、1815）の中で、手取川は扇状地の中央麓線に沿う山島用水を初期流路としていたが、時代の経過とともに南遷し、現流となったと推測している。また、明治十一年代の編纂にかかると皇国地誌では、七ヶの各用水を富樫渠、郷渠などと呼称し、これを手取川の分流として取扱っている。すなわち、七ヶ用水が過去において全て手取川の主流路であったとする立場をとってはいない。さらに、五井敬泉（昭和十年）、斎藤外二（昭和十年）、蔵田晴（昭和四十二年）、平野外喜年（昭和四十五年）も、手取川流路七変化説に疑問を投げかけている。

2.2 地形

手取扇状地は、図2に示すように鶴巻地内の中央部を扇頂として、南は手取川現流、東は富樫山地と相対し、ほぼ直線の開きをもって北面に展開し、日本海に面している。この扇状地と其の周辺の平地は石川平野と通称され、百万石を名高し加賀の田のほぼ中央部にあって、古来加賀早稲米の生産地として京阪地方に其の名を知られた。図2から明らかなように、手取扇状地は典型的な扇状地であり、その等高線の内弧はほとんど平行している。扇状地の半径は、約10kmで扇頂部の鶴巻より海岸の奥（図2、点）を結ぶ扇央線は海岸線とほぼ直交しており、この扇央線は扇出の七ヶ用水の一つ、山島用水の流向と相違が南東から北面の方向をとっている。標高は扇頂部で約90m、扇央線の内弧は平均して130分の1である。また、扇状地の扇縁部から海岸砂丘の内側線との間は半環状の地形相を呈している。

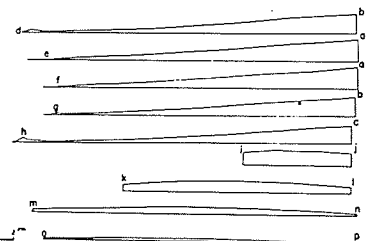
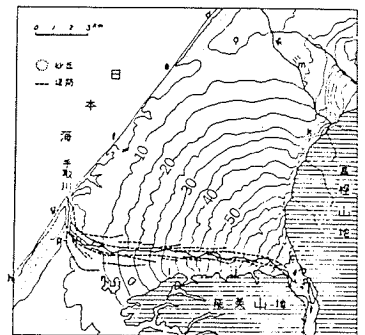


図2 手取扇状地の地形断面図
(川北村史より)

図2下部の各断面形状から、扇央線を中心として、東方と西方へ遠ざかるにしたがって標高が徐々に減少する中で、東部の用水

川は流れを北にそり、西部を流れるものはほぼ西流している。扇状地の東北端は犀川が支流伏見川付近であり、この伏見川は、年取川および古犀川によって形成された二つの扇状地の境界付近の西部に沿って流れて、三河川である。また、扇状地の南端は熊田川の流路である。

以上のような年取扇状地の現地形を考慮すると、土層炭灰が述べているように、扇状縁線東方の低地を流れていた年取川がより高い扇状縁線を集り越えて南遷して現流路をとるようになったことが考えられる。

なお、年取扇状地の形成過程については付録にあり述べる必要はないが、本論文に於ける年取川流路の変遷に関する議論はこの扇状地が概ね現状になった縄文後期以後に限るものとし、その後扇状地の地形が下へく変化するなかったものと仮定する。

2.3 地名・集落分布

扇状地の地形を表わす地名分布図、図3から扇状付近を流れる山島川を境にして、島、河原、窪、洲などの低水の氾濫原であったところを伝えた地名の分布が異なることがわかる。すなわち、山島川から年取川に近づくにつれて、これらの地名の数が増加する。また、近世以来、右にずれたように年取川下流域では、河北に比べて河南地域における氾濫原地名の数が非常に少ない。

表1を見ると、年取川北域には古代・中世の地名と扇状地形を表わす地名とが混在しているのに対して、南域には新旧の地名が混在せず、おおむね山田と清水から下流域にあるものの、その数は少ない。このように、年取川北域に新旧の地名が混在している事実は、とりもなおさず、この地域の開発の古代・中世と近世相の重層を示唆するものであり、開発、洪水による荒廃を経て開発の循環が存在したことはほぼ間違いない。すなわち、古代の遺跡が残っていることは、その地域の古代開発を意味し、年取川の南遷と洪水により荒廃した地域に島、河原などの地名がつけられ、この氾濫による荒廃をまぬかれた地域の地名は時代を越えて残ってきただろうと予想される。

図4に年取扇状地に残っている窪とよばれる平地と島とよばれる高地を想定し、これらの島と島との間の窪地をつなぐことにより過去の流路を復元した一例を示した。図中、点線が通った島系列の端を河が一時断たれるようにせよと流れたものと考えられる。また、この図から、扇状縁線右側地域の流路は、左側のそれと比べて不明確なものが多いためならず、短く断片化していることがわかるであろう。すなわち、扇状縁線から左側地域には扇状地を貫き日本海に至る大河の過去の軌跡の存在がこの図で予想されるものの、右側地域にこうした軌跡を探ることはむずかしい。同様の事例が、13～14世紀ごろ、すなわち鎌倉、南北朝時代以前に成立していた中世の集落の分布図、図5から可能である。すなわち、図4の空白地帯①、②、③が年取川の旧河道であったという推定が成り立つだろう。

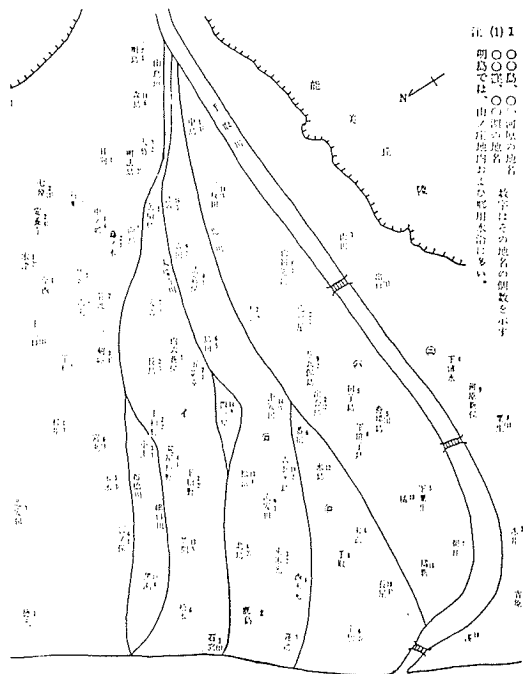


図3 扇状地約を表わす地名分布図(川北村史より)

水系地名	山島川水系 (南川)	大塚川水系	北川水系	年取川の南域 (宮川水系・得城川水系より北部)
古代・中世の遺跡・地名の分布	この川を境にして北の氾濫原とする。	なし	なし	鹿島丘陵の周辺、西山・都田・三浦山にある。
古代・中世の土地所有を反映する地名	多い。	この川を境にして北の氾濫原とする。	数少ない村に散在する。	年取川沿いの村にはない。
古代・中世の地名(古・新・古・新)	多い。	ほとんど川一帯に散在する。	数少ない村に散在する。	年取川沿いの村にはない。
扇状地形を反映する地名	この川より南に多い。	左より多い。	もっとも多い。	年取川の南域にあるが少なくない。
郷・庄・保および中世以前の集落	多い。	ほとんど川一帯に散在する。	数少ない村に散在する。	年取川の南域にあるが少なくない。
近世以前(正統)まで(正統)の地名	年取川の南に多い。	この川より北に多い。	年取川の南域にあるが少なくない。	年取川の南域にあるが少なくない。

表1 年取川南北両域の開発過程対照表(川北村史より)

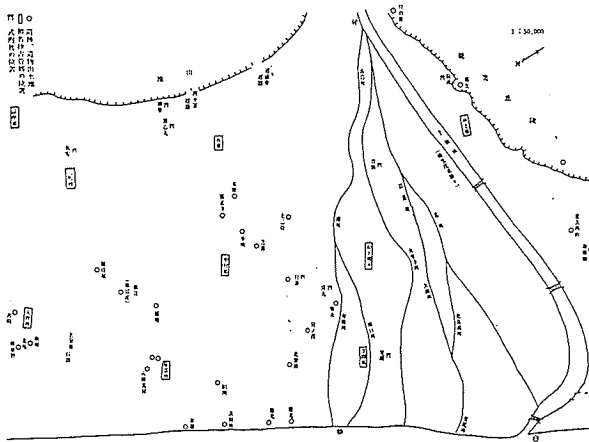


図6 古代以前の歴史地図(川北村史より) ○印: 遺跡、遺物出土地

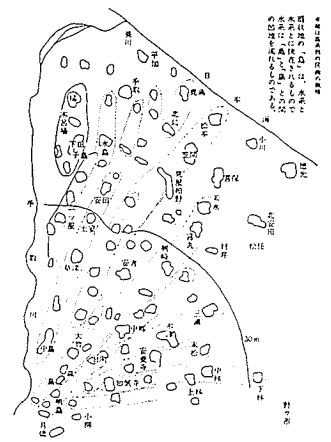


図4 扇状地帯系列の概要(新石器時代より)

2.4 史跡・遺跡の分布

手取川の移動・変遷は扇状地の開発過程とも密接に関係しているものと考えよう。図6は古代以前の扇状地の開発過程を伝える歴史地図である。この図の特徴は、縄文、弥生及び古墳時代の史跡・遺跡が山島川より北及び北東部にあって、この山島川と手取川との中間地域に存在していないことである。ことに手取川が海に注ぐ砂丘地帯には考古学的遺跡が皆無である。この事実を損する一つの解釈法として、古代以前に山島川が大河を流路としていた手取川がその南遷したとあってこれらの遺跡を流れてしまったと考えられよう。

現在の加賀地方は、弘仁十四年(823)の加賀分国以前、すなわち新羅時代は此繁河(当時の手取川の呼称)より南域を江沼郡、北域を加賀郡とみられていた。これを二ヶ郡に分置していた。当時の両郡の生産量を石川県史資料から採り出して示したのが表2である。この表から、此繁河より北の加賀郡は南の江沼郡より高い生産量をあげていたことがわかる。この生産量の地域的分配は明らかでないが、三浦遺跡などの位置から推察すると扇状地線より北部の低湿地帯が高生産地域であったと考えられる。すなわち、少くともこの加賀分国以後には扇状地線より右側地域は手取川の氾濫による穀物の被害をこうなされたようである。

図7は扇状地の微地形・考古学的遺物の出土地・用水路を示す図であるが、この図から、扇状地端部より古墳時代、縄文(図4参照)から北東部に縄文、弥生、古墳時代の遺跡や草葺の泥炭層が広く分布していることが判明し、縄文以前はこれらが皆無である。したがって、手取川が当時、現流路を流れていたかどうかが議論の的として、古墳時代以後、手取川のような大河が扇状地線付近より徐々に南遷し手取川の現流路がさらに進んだと予想される。

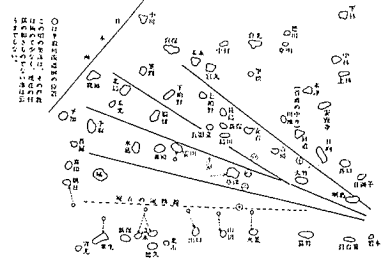


図5 中世の集落分布図(新石器時代より)

年度・性別	数・本	江沼郡	加賀郡
天平元年定大帳①(729年)	数	29,694・石4532	58,080・石2547
	戸	43,827戸	56,185戸
同 課 税②	数	84,094・石40	248,049・石20
	戸	28,555戸	71,672戸
同 計(推定)③	数	38,099・石5932	62,887・石1742
	戸	57,722戸	62,288戸
天平2年定大帳④(730年)	数	31,255・石9230	40,737・石6642
	戸	43,415戸	56,576戸
同 課 税⑤	数	85,811・石10	277,093・石20
	戸	223,645戸	76,365戸
同 計(推定)⑥	数	39,837・石9330	68,446・石9642
	戸	56,795戸	63,211戸
天平3年定大帳⑦(731年)(後史より)	数	7295・石00	30,708・石29
	戸	19,25戸	80,8戸
(石に換して)	数	729・石6	3,070・石529

注 当時10畧は1石に当る。

表2 江沼郡、加賀郡の生産量の比較

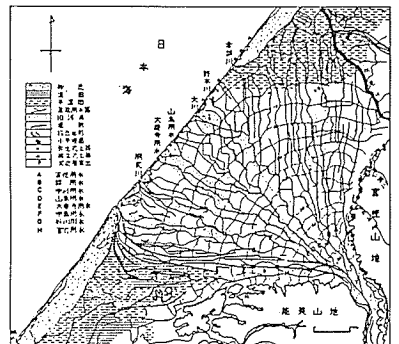


図7 扇状地の微地形・考古学的遺物の出土地・用水路(川北村史より)

2.5 地質

扇状地を構成する物質は地表付近が礫層で、地中には不規則に泥層、砂層が混在し、これらの各層を構成する細粒物が扇状地の地下水を支えている。また、これらの礫、泥、砂の供給源は白山の礫山岩類、粘板岩成岩類などである。

手取扇状地の構成物中、礫は扇央から右側地域に多く、とくに鷺巣と下相野(図5参照)を結ぶ線より南側の高さが約10mより高い地域には礫が多く、深度50cmまでの表土中には礫の混入が認められるが、この線より北東側では表土の中に礫が混入していることはみられない。表土が薄いのが扇状地の特徴といえるが、図8に示したように、手取川現河床付近と手取川流路南の辰口付近の表土は手取扇状地の中で最も薄く、約30cm以下である。これに対して、扇央緩線から右側の大部分の地域の表土の厚さは90cm以上となっている。これを表土層の厚い手取扇状地の各地域ごとの形成時期や新旧を決める裏付けとなり、扇央緩線右側地域の形成時期が左側地域のそれと比較してかなり古いことを示唆している。

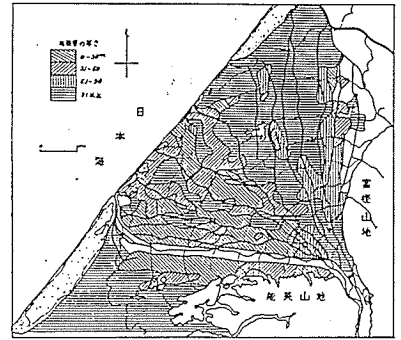


図8 扇状地・堆積層の厚さ(川北村史より)

3. 議論及び結論

前章に掲げた種々の「手取川流路七変化説」に対する反証例を考慮すれば、手取川の主流路は、縄文後期に手取扇状地が形成されて以来、扇央緩線より北をとったことにはなかつたと考え方が自然である。したがって、図1に示した七ヶ用水のうち、扇状地右側地域を流れる富樫、郷友田中村の三用水はかつて手取川の主流路ではなず、その分流として、おもに扇状地右側地域の形成に貢献してきたと考えられる。

かくして、「手取川流路七変化説」はその部分的修正を余儀なくされたわけであるが、それでは手取川の主流路がどの年代に扇状地左側のどの部分を流れていたかという具体的な点に関してはまだ不明な部分が多い。

江戸藩政期以前の手取川流路を伝えた資料は後述するように少ないが、藩政期に入ってからはいくつかの現存する絵図によって当時の手取川の流路を知ることが出来る。図9に示した絵図は元禄十五年(1702)のものであるが、この図から当時、既に手取川は現流路とかなり近いところを流れていたことがわかる。また、図10に示した



図9 元禄十五年(1702)絵図の一部(石川県立図書館蔵)



図10 寛永年間(1624~1643)以前の絵図の一部(石川県立図書館蔵)

た絵図の正確な年代は不詳であるが、少なくとも寛永年間(1624~1643)以前のものと見られる。また、図10の絵図が図9のそれより古いことは前者の図中に描かれた網状流路の数が、後者のそれと比較して少ないことからも明らかである。

図9と図10に描かれた手取川流路の主な違いは図9ではその流路が大きく二つに分かれているのに対して、図10では一本の流路となっていることである。一方、手取川流路のこれらの両図における共通点は、いずれも上流部で鷺巣を通過し、河口部では本岩(現、美川)付近を流れていることである。いづれにしても、藩政期以

後、既に平取川は現流路付近を流れていたことがわかった。

それでは藩政期以前には平取川はどのような流れをしていたのだろうか。例えば、加賀藩徴は二の疑問に對して、平安時代には比叡河（現平取川）は宇奈川付近（図5の宇加あたりを通る流路）を流れていたとしているが、その真偽のほどは明らかではない。また、弘仁十四年の加賀分國の時期に同國の石川郡と能美郡との境界を當時、比叡河と呼んでいた平取川が流れていたことが金城三河巻に記されている。ところが、一方、東大寺諸莊園文書目録には、二の比叡河の北に位置していた石川郡内宇奈間（図4及び図5参照）の名が先述していることから、9世紀はじめの加賀分國（823）の時期に比叡河が現在の平取川は少くとも宇奈間の南側に流れていたことはある。以上、縄文後期から藩政期にかけての流路の時代変遷は明らかであるが、平取川が当初の扇状地縁に沿う流路から現流路へと徐々に南遷してきたとする説の方が従来、唱えられてきた「平取川流路七変化説」より妥当である。

4. 参考文献

土屋義休：重修加賀能美大路水經、至徳四年（1714）
富田景周：金城三河巻、文化十二年（1815）
玉井敬泉：加賀國平取川出水考、昭和十年（1935）
齊藤文二：平取川扇状地に於ける紀世三河巻の変遷、石川教育33号、昭和十年（1935）
蔵田晴：平取川の歴史、北北村史資料貳、昭和四三年（1968）
平野外喜平：新史平取川、北田出版社、昭和四四年（1970）

皇國地誌：明治十年（1897）、昭和49年石川県復刻、
北北村史：北北村史編集委員会、昭和四七年（1972）
平取川七ヶ用水水説（下巻）：平取川七ヶ用水水説編集室、昭和四十六年（1981）
石川県史資料：石川県教育委員会、昭和49年（1974）
東大寺諸莊園文書目録：天保・享和七年（1855）
加賀藩徴：石川県図書館協会復刻、昭和44年（1969）

付録：平取扇状地の形成過程

本付録では、現平取扇状地がいつ、どのような形で形成されたかの概略について述べる。この付録の内容は、北村史の第一章、第一編「北北村の自然環境」の該当部分を要約した内容であるが、本論文の主題である平取川の流路変遷を考察するうえでの大前提となるのでここに記す。

今から約千万年前の新第三紀鮮新世の時代の地層は、図11に示したように富樫山地の谷から北の方へ、能美山地山麓近く部から海抜約150mの丘陵地にかけて広く分布しているが、それより南には全く残っていない。この図のように、富樫や森本付近は入江域にかなり入り込み、その内部には不規則な扇状地があったようである。

大森層時代の入江域の海抜次第に埋められ、潟湖の地形へと変化するに伴って、こうした入江や潟湖に洪積世前期の印辰山層と新第三紀鮮新世の地層が堆積した。とすると、印辰山層が分布している地域は、その下に大森層が露出しているのを常とするが、能美山地だけは例外である。この能美山地では中新世初期の礫岩質、石英粗面岩質の凝灰岩の上層に不整合に印辰山層が露出している。このような地質学上の例外の現象が起ったことが、現在の平取扇状地をここに形成せしめた一大原因と考えられる。すなわち、海成の大森層の上に潟湖成の印辰山層が堆積するようになったのは富樫山地一帯に起った地盤隆起によるものであって、加賀地方ではこの地殻変動を「富樫変動」と呼んでいる。これは反対に、能美山地で、中新世初期の地層の上に不整合に印辰山層が堆積したのはこの地域が地盤沈下したことに由来する。このような両山地の地殻変動の相違により鶴来より上流の両山地の境界線に沿って大規模な断層が

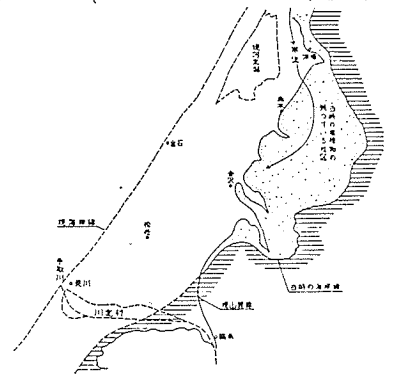


図11 鮮新世時代(約千万年前)の古地理図

形成されることになった。この断層の形成が、これに沿う河川を造るだけ、その結果、この断層境界線が古平取川の主流路となり、その下流部に古平取川が流れ古平取扇状地を形成していったものと考えられる。したがって、平取川が流れてから時代をたどる平取扇状地が形成されはじめた時代は、たいてい「富樫変動」が起った時期、今から約二百万年前の洪積世前期であると考えられる。この当時の古地理図を図12に示す。

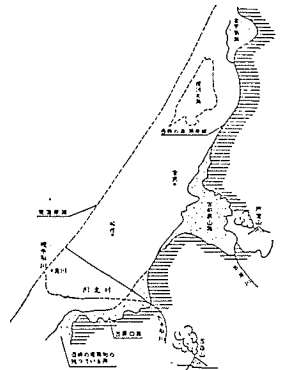


図12 洪積世前期時代
(約二百万年前)の古地理図

その後の古平取川の侵蝕・運搬作用は共に著しく、当時形成された河岸段丘や扇状地は今日ではほとんど侵蝕され尽して、わずかに富樫山地の現海面300~400mのところに残っているにすぎない。洪積世中期の今から四十~五十万年前になると海岸線はずっと内陸の方へ入り込み鶴来付近が当時の古平取川の河口であったらしい。このような内陸深く入り込んだ海は、それまで形成された扇状地や河岸段丘を侵蝕・破壊し、当時の造形物は今日ではわずかに倉け岳付近にのみ分布している。

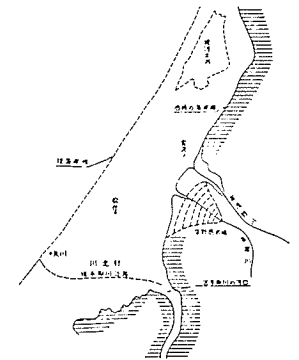


図13 洪積世後期時代
(約四十~五十万年前)の古地理図

今から約十~七万年前の洪積世後期になると、この頃の堆積物が今日でも各所に残っているのでも扇状地の変遷の様相を以前と比較してはるかにわかり易くなった。この当時の古地理図を図13に示す。この図と図2との比較から、当時の海岸線は現在の海面高度で60~80m位のところまで入り込んだことがわかる。その後、海岸線は次第に後退し、今から二~五万年前の洪積世末期の縄文前期になると、当時の海岸線は現海面で120mまで後退した。ところが、今から約一万七千年ぐらい前になると、逆に地球上の気温が上昇したために、海面を上昇を始めた。そして、約八千年前の縄文前期には、それまで進下していた海面が再び現海面に達した。さらに海進は進み、縄文前期すなわち、今から約五千七百年前には現海面で約5~7m位の高度にまで海面を上昇した。すなわち、当時の気温は現在より2~3度高かったために、現海面で約10m以下の扇状地地域には縄文前期以前の遺跡は存在せず、これ以後のものに限られているのはこの理由によるものと見られる。図14に当時の古地理図を示した。この図から、当時の海岸線や砂丘の分布の様子がわかることであらう。また、江沼三湖や河北潟が外海に水が通っていたのも、この縄文前期の海進時代のことであると考えられる。

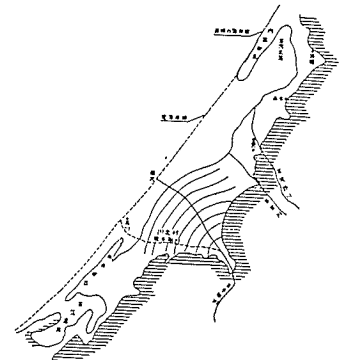


図14 洪積世縄文前期時代
(約五千七百年前)の古地理図

ところが、次の縄文中期から弥生時代を経て古墳時代初頭にかけては、逆に海岸線は現海面以下に降下し、現海面で2~5m程度海面が低下した。この海退により、平取川の侵蝕・運搬作用は縄文時代前期に比べて増し、上流からの侵蝕物を洪水がたまり扇状地に堆積することになった。

平取川が現扇状地を形成を完了したのは、現在の資料を用いて判断する限りにおいては、たいてい縄文後期である。これ以後、現在に到るまでの間、縄文晩期から古墳時代にかけて、扇状地端部の海面10m以下の地域で微地形の変化があったことを除いて扇状地の地形に大きな変動はなかったといえる。